【事例紹介】

コロナ禍におけるオンライン国際交流

-南山大学における実践報告-

Online International Exchange during COVID-19: The Case of Nanzan University

南山大学国際センター特別任用講師　**山田　貴将**

南山大学国際センター特別任用講師　**藤掛　千絵**

YAMADA Takamasa

FUJIKAKE Chie

(Office for International Affairs, Nanzan University)

キーワード：オンライン、国際交流、米国連携校、COIL、英語学習、留学支援

1. 背景

コロナ感染拡大の影響を受け、本学における国際教育交流は大きな打撃を受けた。期間の長短にかかわらず派遣留学が全面的に中止となっただけではなく、三密回避の観点からキャンパス内における国際教育交流活動も停滞していた。筆者（山田）がコーディネーションを担当する本学多文化交流ラウンジ Stella（ステラ）も 1 月の New Year イベントを最後に、活動の一時休止を余儀なくされていた。そのような中、本学国際センターとして、コロナ禍においても国際教育交流を維持・発展させていくために、筆者（山田及び藤掛）が中心となり本プロジェクトの企画運営を担った。本学が大学の世界展開力強化事業を通じて構築してきた COIL（Collaborative Online International Learning）事業（日米をつなぐ NU4-COIL2～地域に根差したテイラーメイド型教育プログラム。以下 NU－COIL）のノウハウ、及び米国連携校とのネットワークを生かす形で本オンライン国際交流は企画された。

2. プロジェクト実施に至るまで

企画開始から開催まで実質約 1 か月であった。企画に際しては、筆者（藤掛）がいくつかの連携校の担当者に企画の背景と趣旨を説明したところ快諾を得た。担当者は米国大学で日本語の授業を担当しているため、日本の学生との交流や日本という国、日本語に関心のある学生たちに本企画についての

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

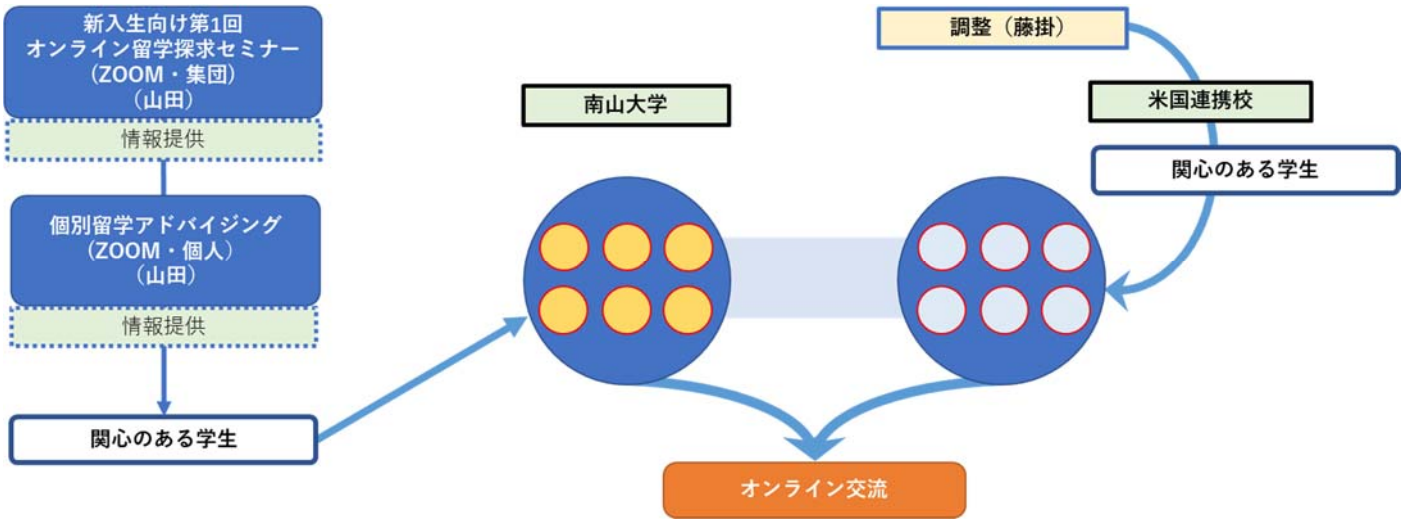
周知は比較的スムーズに行われた。また、本学だけでなく連携校にとってもコロナ感染拡大の影響下では有意義な企画であったため、すぐに同意を得ることができた。一方、コロナ禍にあって、本学学生にイベントを周知していく際には工夫を要した。図 1 が示すように、先ずは、国際センター主催の「新入生向け第 1 回オンライン留学探求セミナー」にて、約 130 名の参加者に対して米国連携校の紹介かたがた本イベントに関する情報提供を行った。

図 1

その後、筆者（山田）が週 1 回、1 年生を対象に実施している個別留学アドバイジングの機会を利用した。具体的には、アドバイジングの中で、アメリカへの留学に関心を示した学生に対して、本イベントについて詳しく説明し参加を募った。オンラインでの募集であったにも関わらず、計 46 名もの学生からの申し込みがあった。上述した本学学生と米国連携校への働きかけのフローを図 2 に示す。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

図 2



3. プロジェクト実施内容

具体的な企画に際して工夫した点を述べる。企画に際しては、1. 時差、2. 人数の不確実性、3. 企画を運営する人員確保、が特に大きな懸念と課題であった。まず、1. 時差については、日本時間の午前 9 時 30 分から 10 時 30 分（アメリカの東部時刻で午後 8 時 30 分から 9 時 30 分）の 1 時間を基本とし、アリゾナ州の大学との交流については、日本時間の午後 1 時から 2 時（アメリカの山岳部時間で午後 9 時から 10 時）に設定することにした。本学の学生については、朝の 1 時限目に授業がある場合には参加できないが、火曜から金曜にかけて毎日開催することで、1 時限目に授業がない曜日に参加できるように計画した。それでも都合がつかない学生を、午後 1 時から 2 時の枠へと案内した。2. 人数の不確実性については、最も悩まされた要素ではある。上述したように、新入生向けのオンラインイベントで留学に関心を示した 1 年生の母集団（約 130 名）のうち、どれくらいの割合の学生が本企画へ参加意思を示すのか予測ができないため、協力をお願いした 3 つの連携校からも何人募ればよいのかわからなかった。あらかじめ参加できる人数を限定して募集することも可能ではあったが、できれば多くの学生に機会を与えたかったこともあり、人数が比較的多いことを前提とした企画を考案した。結果的に、本学の学生 46 名、連携校のうち協力を仰いだ 3 校の学生 39 名が集まった。体調不良等による当日の欠席があったため、プロジェクトに実際に参加した学生数は本学 41 名、連携校 35 名となった。3. 企画を運営する人員については、筆者の我々2 名と事務職員 2～3 名で、動員できるスタッフとしてはそれが限界のようだった。そのため、急遽ボランティアで交流のためのファシリテーターを務めてくれる学生を国際センター・多文化交流ラウンジ Stella（ステラ）の TA や我々が過去に関わりのあった学生から募った。結果的に、5 名の英語が堪能で国際交流に強い関心のある学生を短期間で集めることができた。

企画のスケジュールは以下の表 1 の通りである。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

表 1

		Mon	Tue	Wed	Thu	Fri
2-day Session	week 1	6/29	6/30	7/1	7/2	7/3
			A	B	C	D
		Self-Introduction and your university				
	week 2	7/6	7/7	7/8	7/9	7/10
			A	B	C	D
		Conversation/Discussion/Quiz				
		Mon	Tue	Wed	Thu	Fri
2-day Session	week 3	7/13	7/14	7/15	7/16	7/17
			E	F	G	H
		Self-Introduction and your university				
	Week 4	7/20	7/21	7/22	7/23	7/24
			E	F	G	H
		Conversation/Discussion/Quiz				
1-day Session	week 5 Extra	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri
		7/27	7/28	7/29	7/30	7/31
			I	J	K	L
		Self-Introduction and your university				

簡易的に作成したエクセルシートではあったが、本学の参加学生と米国連携校の担当者に公開したものである。連携校向けには、月曜日（日本の火曜日）開始で木曜日（日本の金曜日）までとし、金曜（日本の土曜日）は実施しないこととした（双方で土日開催とならないように配慮）。セッション A に参加する学生は、6 月 30 日と 7 月 7 日の 2 回に参加でき、参加するメンバーは同じである。これは、一度きりの交流では交流の時間が足りず話も深まらないが、3 回、4 回と回数を増やすと、この企画に受入可能な人数が少なくなってしまうことからの判断である。基本的には 1 人 2 回参加できるが、最後の週は 1 回だけの参加を希望する学生、もしくはその週でしか都合がつかない学生のために設けた。

オンライン交流のプラットフォームとしては ZOOM を採用した。1 回 1 時間のセッションには各回約 3～7 名の参加者があった。基本的に使用言語は英語とし、1 回目では学生たちが自己紹介と自分の大学や周辺地域についての説明・紹介をした。これはアイスブレークのためでもあり、また互いの大学や周辺地域への興味関心を高め、少しでも実際の留学への足掛かりとするためでもあった。本学の 1 年生は入学して以来キャンパスを訪れる機会がなかったため、大学の紹介に限らず周辺地域や、少し話題を広げ、本学を選んだ理由を話す機会も得た。2 回目では、学生ファシリテーターが各自で用意した、ZOOM 会議でも可能なゲームやアクティビティ、ディカッションのトピックなどを提供した。1 回目も 2 回目も同じ学生ファシリテーターがそのセッションを担当した。以下にセッションの概要を図示する（図 3）。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

図 3

南山大学	×	米国連携校
👤👤👤		👤👤👤
ZOOM		
所用時間：1時間/回		
使用言語：英語		
1回目：自己紹介、大学紹介、街紹介等		
2回目：ゲーム、ディスカッション等		

4. 学生ファシリテーターの役割について

今回、学生ファシリテーターを採用したことで、企画が予想以上に魅力的なものとなった。学生の主体性や能力を生かし、リーダーシップを発揮する機会を与えたことで、我々教員が些細な事まで指示しなくとも、学生たちが実に様々なアイデアから面白いアクティビティを提案した。それらの提案については、事前に我々が学生全員と打ち合わせの時間を設け確認をしたが、学生が意見交換をし、互いのアイデアを自分の担当セッションでも採用するための機会となったことの意義は大きかった。また、各回を終えるごとに、簡単に記入できるレポート（「Online 交流活動メモ」）も用意し、上手くいったことやいかなかったことをファシリテーター同士が共有するために以下の表 2 のエクセルシートを作成した。

表 2

Online交流　活動メモ				
ファシリテーター				
DATE				
セッション名	Yamada's / Fujikake's session			
TIME	午前 / 午後　　：　　～　　：			
人数	南山		名	
	米国		名	
欠席者名	南山			
	米国			
活動内容				
全体の感想				
うまくいった点				
うまくいかなかった点／難しいと感じた点				
その他、シェアしたいこと				

活動内容
お気に入りの休日 （favorite holiday)、Guess Game
全体の感想
前回よりみんな楽しんでくれていたと思う。南山生も積極的に参加してくれていた。
うまくいった点
みんな発言していた。日本語も入れながら進めることで置き去りにならなかった。
うまくいかなかった点／難しいと感じた点
Guess Gameで共通して知っていることでないと、なかなか当てずらいかも
その他、シェアしたいこと

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

我々担当教員は、すべてのセッションの ZOOM ミーティングのホストとなったが、すべてのセッションに参加して監督できるわけではないため、開始時刻でミーティングを開始し、問題なくセッションが進行することが確認でき次第、学生ファシリテーターに任せるという場合もしばしばあった。

5. 事務スタッフへ依頼した業務について

事務スタッフへは、人数バランスを考慮した上で学生をどのセッションへ参加させるかを決める振り分けの作業と、メールでお知らせや連絡事項を送信する業務を主に依頼した。また、学生からの欠席連絡等を受ける窓口の役割も果たし、我々筆者がその報告を逐一受けた。セッション開催日の前にリマインドメールを日米双方の学生に送信することも依頼したため、それについては実施期間中の日々の業務となった。各開催日の前日と 3 日前にリマインドメールを送るよう依頼したが、のちに事務スタッフと話し合う中で、業務量と効果のバランスから各セッションの 1 回目のリマインドだけで充分だったのではという議論もあったため、今後の取組みに反映させていきたい。

6. アンケート結果の考察

本オンライン交流を客観的に振返り、今後、より魅力的なイベントを企画・運営していくために本学学生を対象にアンケート調査を実施し、参加学生 41 名の内 35 名（回答率：85.4%）から回答を得た。尚、実施に当たっては、個人情報の取り扱いについて協力者から同意を得た。質問文は稲葉（2008）のアンケート調査を参考にし、必要に応じて変更を加える形で作成した。質問は、「英語によるコミュニケーション」、「異文化理解」、「国際交流」に関する合計 23 個の質問で構成されている。内、20 個の質問は、程度の高い順に 5～1 の尺度で答える形式であり（5＝非常にそう思う、4＝ややそう思う、3＝どちらでもない、2＝あまりそう思わない、1＝全然そう思わない）、残りの 3 個は自由回答である。

6-1. 英語によるコミュニケーションの機会

Q1 英語でコミュニケーションを図る機会がたくさんあった

スケール	Q1	
1	0%	0名
2	0%	0名
3	17%	6名
4	31%	11名
5	51%	18名

「英語でコミュニケーションを図る機会がたくさんあった」に対し、5「非常にそう思う」と 4「ややそう思う」で 82%（29 名）に達した。上述したように、今回のイベントは、各セッションにおける

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

参加者数が、米国の学生、本学の学生それぞれ 2～3 名程度という非常に限られた人数で行われたため、英語力に対する自信の有無にかかわらず、英語を用いてコミュニケーションを図らざるを得ない状況が作り出された結果の数字であろう。以下が学生からの声である。

学生 1：「思ったよりもたくさん話せて楽しかった」

学生 2：「一人一人に話す機会を与えてくださったことで、かならず英語をしゃべらないといけないという状況の中で英語を話すことが出来ました」

6-2. 英語でコミュニケーションを図る意欲

Q2 英語で自分からコミュニケーションを図ろうとした

Q5 英語を話そうとする気持ちが高まった

スケール	Q2		Q5	
1	0%	0名	0%	0名
2	3%	1名	0%	0名
3	31%	11名	0%	0名
4	31%	11名	31%	11名
5	34%	12名	69%	24名

Q2「英語で自分からコミュニケーションを図ろうとした」に関しては、3（どちらでもない）から 5（非常にそう思う）の間でほぼ等しく分散していることから、参加者の英語運用能力にバラツキがあった可能性が示唆される。Q5「英語を話そうとする気持ちが高まった」では 69%（24 名）もの参加者が 5 を選択していることから、今回のオンライン交流イベントを通じて、英語によるコミュニケーションに対するモチベーションが高まったと言うことはできるだろう。そのことを示す学生の声を以下に紹介する。

学生 3：「この体験を通して、英語を学ぶことに対するモチベーションが上がったり、異文化への興味が湧いたりした」

学生 4：「オンライン交流中は英語でのコミュニケーションが大変だと思ったが、もっと勉強しなければいけないという思いが芽生えた」

6-3. 英語によるコミュニケーションの感想

Q3 英語でのコミュニケーションは楽しかった

Q7 自分の話した英語が通じた時、嬉しいと思った

Q9 相手の言うことが理解できた時、嬉しいと思った

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

スケール	Q3		Q7		Q9	
1	0%	0名	0%	0名	0%	0名
2	3%	1名	0%	0名	0%	0名
3	6%	2名	0%	0名	3%	1名
4	29%	10名	20%	7名	23%	8名
5	63%	22名	80%	28名	74%	26名

Q3、Q7、Q9 で 5 を選んだ割合は、順に 63%（22 名）、80%（28 名）、74%（26 名）となっており、以下の学生からのコメントと併せて考えると、本学のイベント参加者の英語コミュニケーションに対する興味関心及び意欲の高さが伺われる。

学生 5：「英語を話す機会と触れる機会を与えてくれてありがたかった」

学生 6：「なかなかない外国人と英語で話す機会を得ることができたから」（満足した）

学生 7：「オンラインのため多少不安があったが頑張って英語を使えて良かった」

6-4. 英語によるコミュニケーンの大切さ

Q4 英語でのコミュニケ―ションは大変だった

Q6 英語で話したが、なかなか通じないことがあった

Q8 英語を聞いても分からなくて困ったことがあった

スケール	Q4		Q6		Q8	
1	3%	1名	9%	3名	9%	3名
2	6%	2名	11%	4名	14%	5名
3	9%	3名	29%	10名	11%	4名
4	29%	10名	29%	10名	37%	13名
5	54%	19名	23%	8名	29%	10名

Q4、Q6、Q8 に関する全体的傾向として、他の質問に比べると参加者の回答が分散していることが挙げられる。Q2 でも考察した通り、参加者の英語運用能力にはばらつきがあり、このような結果につながったと考えられる。具体的に見ていくと、Q4 では、5 と回答した学生は 54%（19 名）であり、半数以上の学生が英語でのコミュニケーションは大変だったと答えていることになる。Q6 は自らのスピーキング、Q8 はリスニングのパフォーマンスに係る質問である。5（「非常にそう思う」）の割合を比較すると、Q6 は 23%（8 名）、Q8 は 29%（10 名）となっており、スピーキングとリスニングに対する困難度合いはほぼ同じ水準になっている。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

6-5. 英語の学習意欲

Q10 英語をもっと勉強したいと思った

Q11 今回のオンライン交流は英語の勉強になった

Q12 英語は使いたくないと思った

スケール	Q10		Q11		Q12	
1	0%	0名	0%	0名	74%	26名
2	0%	0名	0%	0名	23%	8名
3	0%	0名	17%	6名	3%	1名
4	14%	5名	29%	10名	0%	0名
5	86%	30名	54%	19名	0%	0名

英語の学習意欲に関しては、Q10「英語をもっと勉強したいと思った」が 86%（30 名）とかなり高い割合を示した。これは、本調査におけるすべての質問項目の中で最も高い値である。一方、Q12「英語は使いたくないと思った」に関しては、そう思ったと答えた学生（4～5 と回答した者）は 1 名もいなかった。これらの結果から、オンライン交流イベントへ参加した学生は、アメリカ人学生との生きた交流を通じて、自らの英語力にますます磨きをかけたいと思ったのではないだろうか。Q11「今回のオンライン交流は英語の勉強になった」は、4 と 5 を合わせると 83%（29 名）となり、ほとんどの学生がオンライン交流を単に楽しむだけではなく、そこから何かしらを学習していることが分かる。実際、次のような学生の声があがっている。

学生 8：「普段はテストのための英語しか学ぶことが出来ていないが、実際に使う英語に触れることができた」

学生 9：「聞き取れなかった、話せなかった部分のほうが多かったけど、…自分が勉強すべき課題が見つかった」

6-6. 企画の楽しさ

Q16 アメリカ人学生と交流するのは楽しいと思った

Q20 ファシリテーターへの満足度はどうでしたか

スケール	Q16		Q20	
1	0%	0名	0%	0名
2	0%	0名	3%	1名
3	3%	1名	0%	0名
4	31%	11名	20%	7名
5	66%	23名	77%	27名

ほとんどの学生が本企画を楽しんでくれたようである。その具体的な理由は、アンケートのコメント欄に書かれていた内容から、特に「学生ファシリテーターの役割」が挙げられる。以下が参加した学生からの実際のコメントである。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

学生 10:「参加してくださった先輩が優しくて、フォローしていただいたこともあり、楽しくコミュニケーション出来ました」

学生 11:「英語を流ちょうに話し、楽しく交流を進めてくれた」

学生 12:「先輩方が、意見を言うチャンスをくださったり、趣味を紹介したり、楽しく会話をすることができた」

学生 13:「ファシリテーターの方がいなかったらあんなにも楽しむことが出来なかったと思う」

学生 14:「私たちとアメリカ人学生の会話をつなげてくれました。とても明るい方で場が盛り上がり、楽しかった」

学生 15:「気を配って、会話を回してくれたから。参加した全員が楽しめたと思います」

6-7. 知識・理解の深まり

Q13 アメリカの学生の考え方について知ることができた

Q14 日本人とアメリカ人との違いや共通点に気づいたり発見したりできた

Q15 交流を通じて視野が広がった

スケール	Q13		Q14		Q15	
1	0%	0名	0%	0名	0%	0名
2	23%	8名	11%	4名	11%	4名
3	37%	13名	29%	10名	20%	7名
4	31%	11名	40%	14名	46%	16名
5	9%	3名	20%	7名	23%	8名

これらの質問に対する回答は、スケールの 3 と 4 あたりに集中した。企画の段階で予測していたことではあったが、学生からの以下のコメントにもあるように、2 回の交流では、新しいことに気づいたり理解を深めたりすることは難しいことが窺える。

学生 16:「もう少しお互いの文化を知ることができたら、もっとおもしろいと思った」

学生 17:「2 回だけではなくもっと行いたかった」

学生 18:「もう少し長く時間を取れるといいと感じた」

6-8. 国際交流へのモチベーション

Q18 今後、機会があれば、アメリカの学生との交流を続けたいと思う

スケール	Q18	
1	0%	0名
2	0%	0名
3	0%	0名
4	23%	8名
5	77%	27名

今後も交流を続けたいと思う学生は多く、今回参加したことを契機に勉強へのモチベーションや異文化への関心を高めた学生もいたようだ。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

学生 19 :「自分が勉強すべき課題が見つかった」

学生 20 :「異文化への興味が沸いたりした」

学生 21 :「もっと勉強しなければいけないという思いが芽生えた」

学生 22 :「自分の英語力がもっと高ければより充実したと思う」

6-9. 特定の大学への関心

Q17 可能なら、今回交流した相手の所属大学へ留学してみたいと思った

スケール	Q17	
1	3%	1名
2	3%	1名
3	23%	8名
4	37%	13名
5	34%	12名

この結果を見る限り、比較的、特定の大学への関心を高めることは出来たようだが、自由記入欄に特定の大学への興味関心について書いた学生は見受けられなかった。漠然と、「アメリカという国」の学生との交流を楽しむことができたというコメントが多く寄せられた。留学のための大学選びにおいて、今回の企画が良い影響を与えることを願っている。

6-10. 全体の満足度

Q19 イベント全体の満足度はどうでしたか

スケール	Q19	
1	0%	0名
2	0%	0名
3	6%	2名
4	46%	16名
5	49%	17名

全体としての満足度は概ね高かったようだ。学生のコメントから、あまり発言する機会がなかったと感じた学生もいたことがわかった。セッションによって人数に差があり、7 名のグループに入った学生は、おそらく発言回数が少なかったであろう。このことから、特に英語に自信がなかったり、やや性格的に遠慮がちな学生からすると 6～7 名のグループは人数が多過ぎるということが言えるかもしれない。また、個々で嗜好も異なるため、「今後どんなオンライン国際交流イベントに参加したいか」という質問に対しては、多種多様な意見が寄せられた。

学生 23 :「ゲーム性もあればさらに盛り上がり、英語能力を鍛えられると思います」

学生 24 :「互いの国の代表的な文化を体験できるイベントがあれば嬉しいです」

学生 25 :「もう少し、内容の深い話題について英語で話すイベントがあれば、ぜひ参加したいです」

学生 26 :「質問や難しい話題だけでなく、外国人と楽しく遊べるようなイベント」

また今後、多様なイベントを企画し、学生たちに楽しみながら交流を深めていってもらいたい。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

7. おわりに

本プロジェクトを通じて、参加学生の英語学習及び国際交流に対するモチベーションが向上しただけでなく、交流相手の所属大学に対して関心を持つ学生が一定数いたことは、オンライン国際交流の新たな可能性を感じさせてくれた。また、コロナ禍でキャンパスを訪れることが出来ない学生にとっては、本プロジェクトへの参加を通じて、他学生と知り合う貴重な機会にもなった。

今後の課題としては、英語だけでなく日本語を用いた交流も企画する必要性が挙げられる。米国連携校担当者からも、次回は日本語を使用する機会がもっとあると良いとのコメントを得た。参加した連携校の学生のほとんどが日本語学習者だからである。今回は英語使用を基本とした交流だったが、次回は使用言語を日本語とした交流企画を考案していく。また、企画後のアンケート対象者は本学の学生のみであったが、今後は連携校との合意の下、連携校の学生からも回答を得たい。

今回の取組を通じて、コロナ禍にあっても、オンラインの手法を駆使することによって既存の教育メニューから新たなプログラムを生み出すことが可能であることを学んだ。このような地道な努力の積み重ねは、アフターコロナにおける学生のモビリティの向上につながると確信している。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

《参考文献》

稲葉みどり（2008）．国際交流と学生のグローバル・リテラシーの向上--アンケート調査による効果の分析．*愛知教育大学教育実践総合センター紀要*，（11），33-40.

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.